

**編集後記：**皆さんは「雪虫」(ゆきむし)といわれる虫をご存知でしょうか。北海道では晩秋の良く晴れた暖かい日になると、まるで雪が降ってきたようにふわふわと漂う小さな白い虫が大量発生します。この虫を北海道では雪虫と呼んでいます。この虫の正体は、翅が生えて綿毛状のワックスをまとったアブラムシの一種で、空を飛ぶのは産卵を控えてそれまで住んでいたトドマツの根からヤチダモという木に引っ越すためだそうです。今でこそ雪虫が飛んでいると服にくっついたり目や口に入ってきて鬱陶しいと思うようになりましたが、北海道に来て初めて雪虫を見た時には、不思議な光景に見とれてしまったのを覚えています。

雪虫が飛ぶと、およそ1～2週間後には初雪が降ると言われており、北海道民にとって雪虫は冬の到来を

告げる風物詩となっています。地域によっては「綿虫」や「しろばんば」(白い老婆の意味)とも呼ばれており、井上 靖の小説「しろばんば」の冒頭にも、この虫が飛ぶ姿が描写されています。この小説の舞台は大正初期の伊豆ですが、現在では北国以外ではめったにこの虫の大量発生は見られないようです。

私の職場の周りでは10月21日にたくさんの雪虫が飛び交っていました。しかし、この原稿を書いている3週間後の現在もまだ初雪は降っていません。どうも雪虫が飛ぶと初雪は近いという言い伝えはあまり当てにしていけないようです。とはいえ、雪の季節がすぐそこまで来ていることは間違いありません。この週末こそはタイヤ交換したいと思います。

(川島正行)